

浮世草子における「冥加」に関わる語彙について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, 優 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20703

浮世草子における「冥加」に関わる語彙について

田島 優

はじめに

「冥加ない」という感謝の意を示す表現が中世後期頃から使用されるようになった。このことは『日葡辞書』(一六〇三)によっても確認できる。

Miōga ミヤウガ (冥加) よい運命。例、*Miōgamonai hito*. (冥加も無い人)、または、不仕合わせな人。 *Miōga no tōnūqūira hito*. (冥加の尽きた人) 同上。この語は、時には、ある人が自分に相応した程度以上に、あるいは予期した以上に恩恵や厚誼を受けたのに対して、深く感謝する場合にも用いられる。例、*Miōgamonai hito*. (冥加もないこと)

この記述の後半部に記されているように、「自分に相応した程度以上に、あるいは予期した以上に恩恵や厚誼を受けた」場合において感謝表現として使用されていた。しかし、近世になると次第にその語構成や意味用法がわからなくなってきた。例えば、近世前期のことばの矯正書である安原貞室の『かたこと』(一六五〇)には次のような記述(巻一)が見られる。

今めかしきこと成べけれど、冥加といふこと葉のつかひやう有べしと云へり。此字訓に付て。説々侍るべけれど、先一儀を申さば、神明仏陀の御恵にて衆生の冥加を加護したまふといふこと、ぞ。冥慮と申も心はかよひ侍るべし。然るを、此ころかたつ田舎人の云るを聞侍れば、仮令尊貴の人の疎屋へ御入あるやうのおりふし、あるじがたの人の言葉に、扱もくけふの御成は、冥加なひ御ことにてさふらふなどいふこと侍り。是以外これもつてのほかの僻言成べしと云り。冥加に叶ひて侍るなど、はいふべきこと也。但冥加無の無は無の字の心にはあらで、なといへる付言葉にや。縦へば物のたらはぬことをはしたとも申し、はしたなきともいふ。又ははらぐろなる事をもきたなきなど、いふやうのなき歎。しからは、冥加なひは、只冥加などいふ言葉なりとの遁れも侍るべし。されども冥加も御座候はぬなどいふは陳ずるかたなし。冥加の至りにてさふらふなど、は幾度もいふべきことなりと云へり

この記述から、その当時においては「冥加ない」の語構成が理解できていないことがわかる。そのために、身分の高い人による訪問の際に用いられていた感謝を表す挨拶表現の「冥加ない御ことにてさふらふ」に対して、この表現は「以外の僻言」だとしている。そして、このような場合には「冥加に叶ひて侍る」とか「冥加の至りにてさ

ふらふ」といふべきだと述べている。

これまでの拙稿^(注)で明らかにしてきたように、近世前期の感謝表現は、自分の恐縮や困惑の態度を示すことによって、相手に対して感謝の意を表すものであった。この場合であれば、あなたが私のような家にいらつしやることは、私にとつてあまりにも光栄すぎて、神仏の加護がないこととございます。すなわち神仏に見放されてしまいます、というような意味合いになるのであろう。

『かたこと』に見られるように、「冥加ない」の意が次第に人々に理解されなくなり、「冥加に叶ひて侍る」のような理解しやうい、さまざま「冥加」に関わる表現を生み出すことになったのである。

本稿では、『かたこと』より少し後の、西鶴や八文字屋本などの浮世草子における「冥加」に関わる表現を取り上げ、それぞれの表現の意味用法や表現の変化について見ていくことにする。

一 西鶴作品における「冥加」を伴う表現について

西鶴の作品には、「冥加ない」の使用は1例しかない。しかも「冥加なき仕合」とあり、「仕合」を伴って使用されている。

其ま、梅之助に、「只今登城すべし。しばしの内、叶はざる御用あり。もし病中といはゞ、乗物にて迎ひ来るべし」と、歩行六尺數十人、御手医者坂川玄春、御使者には今の御物甲斐品之丞をつかはされけるに、内蔵、
 「是は冥加なき仕合」と、早々梅之助を送り（『武道伝来記』五・二 一六八七）

『日葡辞書』では「冥加ないこと」で感謝の意を示すことが記述されていたが、ここでは「仕合」という明確に感謝や悦びの意のある語を伴い、その語を修飾している。わざわざ「仕合」を伴っていることからすると、「冥加ない」自体の感謝の意が通減し、「冥加ない」自体に感謝の意があることがわからなくなっているのではないだろうか。ただし、「冥加ない」が「仕合」を修飾していることは、単なる「仕合」ではなく、程度の大きい「仕合」ということであり、「冥加ない」が程度の大きさを表す形容詞となっているように見える。

この文章においては、感謝しているのは梅之助ではなく、梅之助の父親の内蔵である。このような表現になっているのは、息子本人ではなく、息子の立場を父親が表現しているからであろうか。これについては八文字屋本における「冥加ない」の用例と合わせて考えたい。

西鶴の作品には、「冥加」に関わる表現としては、「冥加ない」の他に、「冥加ある」、「冥加おそろしい」、「冥加につく」、「冥加にかなふ」の四つの表現が見られる。「冥加ある」は、「冥加ない」とは「冥加」について有無の関係になる。ただし、「冥加ない」は状況によっては感謝の意を表す用法を持っている。また、先の「冥加なき仕合」からわかるように、「冥加なし」で一語化している。それに対して、「冥加ある」の場合は文字通り「冥加」が「ある」という主述関係である。

此時ときのうれしさ、「あの君きみに七代まで大夫冥加めうがあれ」とぞ願ふ。(『好色一代男』七・六 一六八二)

世之介が軒下に隠れていることに気づきながらも、それを見逃してくれたなか津に対して、世之介が感謝している場面である。ここでは「冥加」の前に「大夫」が付加されている。これは、なか津がいつまでも大夫として全盛

を続けられるよう神仏の加護がありますようにと祈っているのである。あくまでも「大夫」としての「冥加」というように、ある面に対して限定しているのである。このような「冥加」の前に名詞が付加して限定する用法が次第に増加してくる。現在では「冥加」ではないが、「役者冥利」「教師冥利」のように使用されている。次の例も、「冥加」の前に「命」が付加されている。

おのれは、六波羅の高敷のうらにかくれゐて、ここ、夜盗の学校とさだめ、命冥加のある盗人に、この一通り指南をさせ（『本朝二十不孝』二・一 一六八六）

石川五右衛門が、盗人（泥棒）学校を作つて、「命冥加のある盗人」には盗人としての一通りの指導をしたとある。この後にも段階に応じた指導が記されている。かこさとしの『どろぼうがっこう』（一九七三 偕成社）のようである。「命冥加のある盗人」は経験の長い年輩の人を指していよう。盗人をしてきたが、死罪にもならず、命に関して神仏の加護があつて長生きをしているということにならう。「冥加ある」の二例ともに限定された「冥加」である。

次は「冥加おそろしい」である。西鶴の作品には2例あるが、ともに商家の妻の贅沢さを表すのに使用されている。

襦も木紅の二枚がさね、白ぬのの足袋はくなど、むかしは大名の御前がたにもあそばさぬ事、おもへば町人の女房の分として、冥加おそろしきことぞかし（『世間胸算用』一・一 一六九二）

殊に妻子の衣服、また上もなき事共、身の程しらす。冥加をそろしき。高家貴人の御衣さへ、京織羽二重の外はなかりき（『日本永代蔵』一・四 一六八八）

商家の女房の服装が派手になり、大名の御前や、高家や貴人でさえ着なかつたものを身につけている。分を過ぎた行いをしてるのである。そのことに対して「冥加おそろしい」と表現している。「冥加」が「おそろしい」というように主述関係になっている。ここでは、「冥加」の本来の意味の神仏の加護というより、神や仏による罰が恐ろしいことになろう。あくまでも神仏の加護にこだわれば、「冥加（ないことが）おそろし」というような意味合いになろう。そのような行為は、神仏の加護から見放されてしまい、罰があたるようで恐ろしいとなろう。

次は「冥加につく」である。現代では「冥利につきる」という形で用いている。例えば『新明解国語辞典』（第七版 二〇一二）では「〔それ以外のものでは決して味わうことの出来ない〕人間としての最高の△充足感（幸福感）。」とあり、プラスの意味で記述されている。しかし、拙稿（二〇〇四）「冥利（冥加）に尽きる」考」（『日本文学ノート』三九）で述べたように、もともとはマイナスの意味であった。プラスの意味に転じるのは大正時代以降である。時期的に見れば、西鶴の作品においてはマイナスの意味になると思われる。それでは用例を見ていこう。

勿体なくも、親達に足をさすらせ大小便とられ、冥加につきし身のはて、親のばちあたりと、名のりける（『本朝二十不孝』五・三二）

思ひもよらぬ事に、独残り給ひし母また刃にかけ、年来の敵は打ずしていやましにうきめをかさぬる事、是程、侍冥加にも尽きぬ者か、よし／＼是迄と、すでに自害と見えしが（『武道伝来記』四・三）

前者の『本朝二十不孝』の例は、両替屋の才兵衛という男のことである。才兵衛は、力自慢で、高松の荒磯と名のり相撲をとって四国一番の取り手になった。ところが、ある山里で夜宮相撲があつた時、地元の強力と組み合っ

た際に、投げられて骸骨あばらほねがくだけてしまった。そのために両親に看病してもらおう身になってしまったのである。神仏の加護が終わり、神仏に見放されてしまったのであり、マイナスの意味で使用されている。後者の『武道伝来記』の例は、母を相手の刃にかけられてしまい、その上敵が打てないのは、侍としての命運が尽きはててしまったのである。このような身分や職業が「冥加」を修飾する場合は、「神仏の加護」というよりも、侍としての命運ということになる。ただし、その命運の背後には神仏の加護が関わっている。前者の才兵衛は「高松の荒磯」という四股名で相撲をとっていたが、怪我をしてからは「親の罰あたり」と四股名風に呼ばれているように、罰があつたのである。

次は「冥加にかなふ」である。「かたこと」にも記されていたように、プラス表現である。「かなふ」とは、目的や趣旨に合致するとか、願望が実現する意を表す。この場合も、「冥加」の前に「武士の」というように限定のことが置かれている。

橋山刑部とて、奥州福島にて、出頭この一人、殿とのの御心底我物にして、御機嫌きげんよろしければ、栄華まぐはの時を得て、
 武士ぶしの冥加みやうにかなひ、一家いけ中この人に思ひ付事つて、御威光おごひこうばかりにあらず（『武道伝来記』一・二）

橋山刑部は、殿のお気に入りであつたので、武士としての望みが実現したのである。

このように、「冥加」は近世中期においては、背後にある「神仏の加護」よりは直接関わっている身分や職における命運という意味合いが強くなってきている。「冥加」の前に名詞が接続して「冥加」の範囲を限定するようになったからであろう。それが原因なのかまだ判断がつかないが、「冥加」の衰退に伴って、新たな表現として「冥利・冥理」

が生まれてきたとも考えられる。

西鶴の作品では、まだ「冥利」は使用されていないが、「冥理」が1例見られる。『日本国語大辞典 第二版』では、「冥利」と「冥理」は別の見出しになっている。「冥利」は仏典に典故があるが、「冥理」は仏典や漢籍に典故は認められないようである。また、『日本国語大辞典』では、「冥利」に対しては、「①仏語。仏菩薩が知らず知らずの間に与える利益。②転じて、人が知らず知らずの間に、神仏や他人などから与えられる福利・恩恵。」とある。一方の「冥理」に対しては、「人の目には知られない神仏の考え。また、隠されている道理。」と語釈を施している。辞書という性格上、「理」と「利」との違いを出そうと努めているようである。さて、西鶴の作品では次のようにある。

され共、父滝之進、武士の本意に背きたる冥理の程、弓矢神にも見はなされし、天罰のがれずして、角之丞に
 酬て、只今御手にかゝりたり（『武道伝来記』六・三）

父である滝之進が五助を毒殺したことによって、滝之進の息子である角之丞は五助の息子である五七郎に討たれた。それは、滝之進が武士の本意に背いたから、その天罰が息子角之丞に降りかかったのだと、母が説明している。「程」は形式名詞であるが、原因理由を表す接続助詞の役割を果たしている。『日本国語大辞典』は、この用例をもとに「冥理」の語釈を施しているようである。先に見たように、「人の目には知られない神仏の考え。また、隠されている道理」としている。文脈的に「利益」といったプラスの意にすることはできないので、「考え」としたのである。新日本古典全集（小学館）は「因果」と訳して語自体をマイナス的な意味合いにしている。近世前期において、「冥加」に関わる表現がプラスにもマイナスにも使用されているように、「冥理」も中立的な語と見た方がよいだろう。

新大系（岩波書店）が「冥利」の宛字とも見られる」という解釈に納得がいくところである。なお、弓矢神とあるように、武士においては弓矢神が関係しているのである。「冥加」や「冥利（冥理）」の前に身分や職が来た場合には、その身分や職に関わる神が関与して、またその神に見放されると天罰が下るのである。

『日本国語大辞典』では、『好色二代男（諸艶大鑑）』の「名利」の例を「冥利」の中に入れていいる。「冥利」の中の④の「身分、職業などを表わすことばの下に付けて、「自分の身分・職業にかけて」と誓いの意を示すのに用いる」の用例として上がっている。この箇所は各遊女屋の口癖が記載されていて、興味深いところである。

其家の姉女良のまねをするにや、聞とがむれば、定まつてくせあり。新屋のあ、しんき、木村屋の百瀬、扇子屋のあ、ゑず、八木屋のつがもない、金田屋の名利、明石屋のうるさ、丹波屋の無下ない、藤屋のてんと、堺屋の下卑た、松原屋の気の毒、伏見屋のにくやの、塩屋のそれとても、京屋の何が扱、大坂屋のみちん、住吉屋の今にかぎらず、槌屋のけりやう、湊屋の神ならぬ身、茨木屋のそもや、此外遣手禿までも、口ぐせあれども、書につきず。大かたの事は人も見ゆるかし（二・五 一六八四）

遊女屋の口癖にはマイナス的な悪いことばが多い。その中で、金田屋は「名利」が口癖であるという。注釈書によると、『日本国語大辞典』と同じように、この例は「冥利」に相当するものと考えられる。新大系は「約束を背けば神仏の加護が尽きてもかまわないと、自ら誓って言う語」としている。この店では客にむやみやたらに誓っていたようであり、その場合に「名利（冥利）」を用いていたのである。

以上、西鶴作品に見られる「冥加」に関わる表現について見てきた。中世の「冥加」とは違い、神仏の加護とい

う意味合いは薄れてきたように思われる。「冥加」の前に身分や職業の語が付くようになり、その場合にはその人の全体に関わるものではなく、その人の身分や職に関わる命運というように限定されている。漠然とした神仏ではなく、その身分や職に関わる神の加護というふうになってきている。また「冥理」という表現が見られるが、これは「冥利」と繋がるものと思われる。

二 八文字屋本における「冥加」を伴う表現について

八文字屋本とは、京都の八文字屋から出版された浮世草子のことである。一七〇一年（元禄十四）刊の江島其碩の『けいせい色三味線』以後、一七七〇年代まで刊行された作品を指す。時代的には西鶴の作品よりも十年ほど後のものから百年後までのものを含んでいる。八文字屋本における「冥加」に関わる表現について見ていくが、用例の検索にあたっては汲古書院から刊行された『八文字屋本全集 索引』（二〇一三）を利用した。西鶴一人とは異なり、それぞれの表現について用例が多い。この八文字屋本を利用することによって、各表現の使用状況をより明確にできると思われる。

西鶴が使用していた表現である「冥加おそろしい」「冥加につく」「冥加にかなふ」に加えて、八文字屋本では新たに「冥加に余る」「冥加しらず」が見られるようになる。また、「冥加」にとって代わる表現と思われる「冥利（冥理）」に関わる表現の使用も多くなっている。

各表現について見ていくことにしよう。用例数は「冥加ない」が11例、「冥加おそろし」4例、「冥加につく」が11例、「冥加にかなふ」27例、「冥加にあまる」が14例、「冥加しらず」が7例、「冥利（冥理）」に関わる表現が6例

ある。用例数の多いものもあるので、紙幅の関係で全用例を扱うことはできない。「冥加ない」にはプラスとマイナスの用法があるので全11例を扱う。また「冥利（冥理）」に関わるものは、「冥加」との関係を見るために、これも全7例を扱う。他のものについては、用例の中で用法の大きな違いがないので、5例以上あるものは5例にとどめる。すなわち、「冥加につく」「冥加にかなふ」「冥加にあまる」「冥加しらず」に関しては5例だけを示すことにする。各表現の用法を理解するために使用されている状況を説明する。そして、それぞれの表現がどのような意味合いで使用されているのかを考えてみたい。

二一 「冥加ない」

「冥加ない」が感謝表現として使用されるのは、身分の上の人から厚意あることをしてもらった場合である。自ら行ったことや他の人が行ったことに対して「冥加ない」と言うのは、その行為が身分の高い人に対して失礼にあたる場合である。八文字屋本には「冥加ない（冥加もない）」が11例見られるが、相手への感謝の表明と、相手の失礼に対する咎めとの両方の用法が見られる。まず感謝表現の場合としては次のようなものがある。

- ① 益左衛門父子にあひ、御意の趣を述べ身にくもりなきにおゐては神文を書て上らるべしと申しければ、益之丞承り誠に有難御上意冥加なき仕合かしこまつて神文をした、めさし申べきが（「武道近江八景」四 一七一九）

② 沖之進不便に思ひ、コレ修理之助。幼少より律義なる生れつき。少々の仕損じは。宥免して勘当許してやつてたも。身が侘するぞとありければ、冥加もない御まへの御言葉にかけらる、やうな奴めにてはなく候。やい不

届者め。(『契情お国譚妓』五 一七三〇)

- ③ 冥加めうがない。御世話ごせわにあづかる忝いと。しらぬが仏有りがたがる(『暁太平記後楠軍法鑑桜』三一七 一七三二)
- ④ 平家無二の忠臣との御詞ごことば。梶原頭かじはらかうべをうなだれ。有難ありがたき御錠ごぢやうの趣おもむき。不慮ふりよの事にてかゝる御錠ごぢやうを承事まこと。誠まことに武運うんに叶かなひ。冥加めうがなく覚候おぼへと。謹つとんで述べれば(『敦盛源平桃』二二 一七四一)
- ⑤ ほんに命の親と申も。お腹が立ませふが。生たほとけさま。お冥加ハイもござりませぬと。二念なくよろこぶてい

(『風流庭訓往来』二 一七六三)

「冥加ない」の用例の内、感謝表現として使用されているのは約半数である。①は、大殿の御上意に対して「冥加なき仕合」と述べている。西鶴の用例と同じように「冥加ない」は「仕合」を修飾する形になっている。ここでは、その後そのありがたいおことばには従えないことを述べている。②は沖之進が、修理之助に対して浮世又平を勸当することを思いとどまるように頼んだことに対して、修理之助が「冥加ない」と述べたのである。沖之進の言葉自体は又平に対してはとてもありがたいおことばであると述べ、その後そのようなおことばをかけられるような奴ではないと答えているのである。ともにその後そのことばに従えないことが述べられており、心からの感謝とはいえないだろう。身分の上からの人のことばに対してすぐに反論できないので、一旦は感謝の意を述べるのである。それに対して③・④・⑤は心からの感謝といえよう。③は、実は相手に騙されているのであるが、その相手に対して「冥加ない」「御世話にあづかる」「忝い」と三つもの感謝表現を並べている。感謝の度が強いともいえようが、このように感謝表現を重ねることは「冥加ない」や「忝い」の感謝の意が薄減したともいえよう。④は、経盛卿からのありがたいおことばに対して、「誠に武運に叶ひ、冥加なく覚候」と、挨拶ことばの形式に従って感謝の意を述

べているのである。⑤は、病気である乞食に対して勘解由が薬を与えた。そのことによって、病気が回復したことに對する感謝の表明である。「お冥加もござりませぬ」と、敬意を籠めた表現で感謝の意を述べている。「ない」の丁寧形が「ござりませぬ」であることから、「ない」は強意の接尾語ではなく、「無」を表す形容詞であることがわかる。これらの例から、近世中期においても「冥加ない」が感謝の表現として使用されていたことが確認できる。なお、①の例から、西鶴の例において「冥加ない仕合」とあつたのは、父親によるものであつたからだとはいえないようである。

このような感謝表現に對して、⑥から⑩は身分の高い人へに對する(自らの)行為が「失礼である」ことを表す「冥加ない」の用例である。

- ⑥ うぬめらは兄河津殿をいかなる意趣にて射ころせしぞ。まつすぐに申せとあれば。兩人けうとき顔をして。我々はいやしき町人。いかで殿様へさやうの冥加なき事を仕るべき。定而人のいひあやまりにて候べしと陳じければ(『当世御伽曾我』二 一七二三)
- ⑦ 鞆姫は正しき白河院の御孫の姫宮成を。賤しき伊勢平氏が娘なりときらはるゝは。もつたいたいといふべきか。冥加ない事共と。景清にきけがしのひとりごとこそいぶかしき(『御伽平家』四 一七二九)
- ⑧ いかにしらぬ身なればとて。父のそとばに足をかけ。踏たる我はつたへ聞。阿闍世太子に百倍の十悪罪の不孝もの。ゆるさせ給へとそとばを拜し。冥加ないもつたいたい(『御伽平家後風流扇子軍』二一七一 七二九)
- ⑨ 朱溪斎に申けるは。主人信吉御来駕を浅からず存。御馳走の為是に休み所しつらはせ置候。屋かたまではいまだ道の程もさふらへば。暫是へ御入有て。御休息なさるべしといひければ。ハレヤレ御丁寧成御事いたみ入。

折角御心ざしにて仰付られたる休息所。のり打には冥加なし。成ほど休み参るべしと(『富士浅間裾野桜』四

一七三〇)

- ⑩ 頼義公誅伐の論旨を似せてくれとの頼み。冥加ない事とは思ひながら。三百両下されなば。した、めて進ずべしと。かたく約して好みの文段。職事の筆を似せ。論旨を書いてつかはしぬれば(『風流東大全』三 一七三二)
- ⑪ まがきよ。けふよりわらはに成かはり。殿のおねまの上おろし。おのへの前を産の子と思ひ。大切ニそだてあげて。くれぐれのむと仰られし時。こなたはの。顔まつかいにし。もつたない何事を仰出されます。そまやお姫様をうみの子とは。冥加ないといろくしんししやくの詞をお聞入れなく(『風流東大全』四)

⑥は、河津殿を射殺すことに対して「いかで殿へさやうの冥加なき事を仕る」と述べている。殿を射殺すという目上への行為である。⑦は、清盛は白河院の子であるから輦車姫は実は白河院の孫なのであるが、その輦車姫を平清盛の娘だといって、左大臣家が花嫁として不相当だと言っているのは、私(五十の年寄り)からすれば「もつたない」というべきか「冥加ない事共」と述べているのである。⑧は、有王は自分の主人である俊寛を流人にしたことよって憎んでいた(多田)行綱が本当は自分の父であることを初めて知り、その父のそばに足をかけて踏んだことを後悔して「冥加ない。もつたない」と述べているのである。⑨は、信吉長者が我々(朱深彩ら)をもてなすために作った休息所を、無視して通り過ぎるのは「冥加なし」と述べ、休息をとったのである。⑩は、「今迄心誓文立て止たるにせ物」作りを、娘を助けるために、その誓文を破つて「にせ物の頼義公誅伐の論旨」を書こうとしていることに対して、「冥加ない事」と思っているのである。そして、偽の論旨を書いた、この草軒は殺されたが、その亡魂は「御論旨を似せ」たことに対して「悪き」と述べている。⑪は、死にかけている輦車姫から、まがきに対して姫

を産みの子と想って大切に育ててほしいと言われ、「もつたない」と言い、姫様を産みの子とすることは「冥加ない」といって、いろいろ斟酌（辞退）のことばを述べている。辞退のことばを述べていることからわかるように、感謝表現ではないのである。自分が姫様を産みの子とすることはとても恐れ多くて失礼なことなのである。

これら⑥から⑪は、先に扱った①から⑤とは異なって、身分の上の人への行いが「冥加ない」のである。これらは上の人に対して失礼なことになり、「もつたない」と併用されることが多い。

二二二 「冥加おそろし（冥加がおそろし）」

⑫ 私近々笠や町で色茶や仕ります。女道のまけたを悦びお祝ひの金をもらふては、冥加がおそろしいと身をふるはすれば（『遊女懐中洗濯』風流之巻 一七〇九）

⑬ めのとの小侍従す、み出、私などのやうな数ならぬ女の、御前ちかふ罷出、殿様へ申上るはもつたないと申さふか、冥加の程もおそろしい事ながら（『御伽平家』一 一七二九）

⑭ かりそめながら御位高き君達。我等風情が恋奉るは冥加恐しく、今生にては叶はぬ事と、それより思ひしづみ（『愛護初冠女筆始』五 一七三三）

⑮ もつたないなひ私風情のものが、先祖よりの御主を僕にして、どふせいかふせいと申はあまり冥加おそろしけれども（『雷神不動桜』四 一七三三）

「冥加おそろし」はこの4例である。「おそろし」とあるように、この4例を見ていくとマイナス的な表現で用いられている。西鶴の用例と同じように、神仏の加護から見放されるのがおそろしいとなろう。西鶴の「冥理」の例

で見たように、神仏に見放されると天罰が下るのである。

さて用例を見ていこう。⑫は、女道と衆道との争いにおいて衆道が勝った。そのことにより、衆道方の大尽が皆にお金を振る舞ったが、忠兵衛はそれを断った。その理由は、忠兵衛は色茶屋を経営しているからである。そんな自分が、女道が負けたのを悦んだ、そのお祝いの金をもらっては、「冥加がおそろしい」のである。⑬は、右馬助うまのすけ家盛もりの乳母である小侍せうじ従じゆが、清盛公の近くに出て、清盛公に対して直接申し上げることは「冥加の程もおそろしい事」なのである。この表現の前に「もつたいたいと申さふか」と述べているように、はなはだ恐れ多いことなのである。⑭は、一介の浪人である半内が二条の藏人の若君である愛護を恋い申し上げるとは、「冥加恐ろし」いことなのである。⑮は、先祖から小野家に仕えている大原万九が医者退安と名乗り、芝山伝内と名乗っている主人である小野春道を自分の草履取りにしていることが、「冥加おそろし」いのである。

⑫を除いた⑬から⑮は、身分の下の者が上の者に対して、そのような行為をしていることが「冥加おそろし」と表現されている。身分の差がありすぎる相手にそのようなことをするのは失礼であり、神仏の加護から見放され、罰がおそろしいのである。⑫は、女道によって生活させてもらっている忠兵衛にとって、衆道がその女道を破ったお祝いのお金を受け取ることは、神や仏の道に背くことになり、天罰があたることになろう。

二二三 「冥加につく」

- ⑬ 是がくらはれる物かと足にて膳ぜんを踏ふみかへすは、めうがにつきるおごりもの（『けいせい籠照君』四 一七一八）
- ⑭ 私儀わたくしぎは大殿様の御寵愛ごてんあいにはこり冥加みやうがにつきかやうの姿すがたと成はて申せしなり（『武道近江八景』五 一七一九）
- ⑮ そちは虚病きよびやうをかまへ禄ろくは給はりながら奉公ほうこうもせずして、其冥加みやうがにつきてあほうばらひにあひし、轟雲とくろきうん右衛門

にてはなきか〔楠三代壮士〕四 一七二〇)

①⑨ かく手に握りし敵をば、恩ある養父の述懐によつて、討事ならぬ時宗が、運の程こそつたなけれ。弓矢の冥加につきぬるか、鬼をあざむく血気の五郎、大地を打てなげきしは〔記録曾我女黒船〕二 一七二八)

②⑩ 人迄に大分の損をかけ、其上に大坂のすまるものならぬ身の果主の冥加につき、天道にくまれ、生死も知れぬ身の仕舞〔世間手代気質〕三 一七三〇)

「冥加につく」は11例ある。いずれも格助詞としては「に」になっている。なお、『日葡辞書』では「冥加の尽きた人」とあり、「冥加が尽きる」となっていることに注意しておく必要がある。現代では「冥加に尽きる」は、先に述べたように、最大限のしあわせに恵まれることであり、プラスの意、それも最大限のプラスの意である。八文字屋本では、西鶴の用例と同じく、マイナスの意味で使用されている。

例を見ていこう。①⑥は、足で食べ物の膳を踏みかえすことは山柙大夫の「めうがにつきる」おごりなのである。①⑦は、左衛門の子息益之丞は大殿である佐々木高頼の寵愛を誇り、その結果このような出家の身になったのは「冥加につき」だからだとする。①⑧は、轟雲右衛門が俸禄を貰いながら仮病をつかつて奉公しなかつたために追放されたのは、「冥加につき」だからなのである。①⑨は、時宗(五郎のこと)は、親の敵である工藤祐経(すけつね)を目の前にしているながら、恩のある養父祐信(すけのぶ)の述懐(愚痴や嘆き)によつて、敵討ちができないのは自分の運の悪さであり、武士としての「冥加につき」てしまったのだらうかと嘆いているのである。②⑩は、主人の遺言によつて分家した手代二人の内、三郎兵衛の方は相場に失敗して大損をして人にまで迷惑をかけて、大坂に住めなくなった。それは、店の主としての「冥加につき」て、天道にまで憎まれてしまったからだとする。

「冥加につく」とは、神仏の加護が尽きてしまつて、神仏から見放され天罰が下り、その結果落ちぶれてしまふのである。⑲と⑳とにおいては、それぞれ「弓矢の」「主の」という「冥加」を限定することはが施されている。「冥加」単独が漠然とした神仏であるとすれば、「弓矢の冥加」とは武士に関わる弓矢神の加護、「主の冥加」とは店の主に関わる商の神の加護が尽きてしまつたということになる。

二一四 「冥加にかなふ」

⑲ 若旦那おらん殿に御執心のよしさ、やけば梅薫悦び、我ら式の娘御目に入りし事、誠に冥加に相叶ひ、忝じけなく存入り候（『風流曲三味線』四 一七〇六）

⑳ 身にとつての面目かゝる事ならずは頭の殿のいやしき我等に供仕れと御詞のかゝるべきや。冥加に叶ふ仕合と悦びいさみ（『義経倭軍談』六 一七一五）

㉑ 此猿を指上げをけば、みづからは依頼御屋形出入自由なれば、願てもなき幸と悦。誠ニ冥加にかなひ有難き仕合。成程指上申べし（『愛護初冠女筆始』一 一七三五）

㉒ 身不肖の某を、人がましく思召、たのむとあつて御入くだされ候段、生前の面目弓矢の冥加に叶ひ、ありがたく存じ奉ると、平伏して申ければ（『暁太平記後桶軍法鏡桜』三・八 一七三三）

㉓ かゝる手がらのさなだを打は、そちも商冥加にかなふたと思ふて、間にあふやうに随分と精出して打せてくりやれ（『三浦大助節分寿』二 一七三四）

「冥加にかなふ」は27例あり、その当時よく使用された表現であることがわかる。「かなふ」とあるように、プラ

ス評価の表現である。この表現のあとに「忝じけない」や「仕合」、「有り難き仕合」、「ありがたく存じ奉る」といった感謝や悦びの表現を伴うことが多い。感謝の度が大きい、その当時の感謝表現といえよう。相手の神仏の加護によつて思いが叶い、よい結果となつたと感謝しているのであろう。「冥加ない」のような場面による語用論的な表現ではなく、「忝じけない」や「仕合」、「有り難い」という感謝の意をはっきり表す語がないと、相手に感謝の意が明確に伝わらなくなつてきたのであろう。感謝表現が、「冥加ない」から「冥加にかなひて仕合」などに代わつてきたのである。

さて用例を見ていこう。②は、若旦那の竹五郎が梅薫の娘のおらんに執心であることを聞き、梅薫が我ら如きの娘が若旦那の御目になつたのは、「冥加に相叶」つたことで、「忝じけなく存じ入り候」と感謝を述べている。②は、頭の殿である義朝が、その辺りの道に詳しい、美濃の国あふさかの長者大炊おほひの弟である鷺の巢ねすの玄光げんくわうに対して供をするようにとのおことばがかかつたことは、玄光らにとっては「冥加に叶」ひ、仕合わせだと悦んでいるのである。③は、二条藏人清平の若殿である愛護は、田畑之介の女房を連絡係としたために、その女房が猿回しとして使っている猿をほしいという。それに対して、田畑之介はこの猿を差し上げれば、屋形に自由に入出入りすることができるようになるので、愛護のことばを「冥加にかなひ」て「有難き仕合」と思つたのである。④は、大塔の宮様が、私（竹原）を一人前だと思つて、私に頼むと言つて仲間に入れて下さつたことは、武士における「冥加に叶」つてうれいことと思ひますと、武士の名誉として感謝を述べているのである。⑤は、俣野またの五郎景尚かげじやうが石橋山合戦の功の祝儀としてさなだ織を褒美とするために、長尾新吾を通して、六郎大夫の店に注文をした。そのことを、使である新吾が主人の六郎大夫に対して、商売の「冥加に叶ふた」ことだと思つて、すなわち光栄なことだと思つて期日までに完成させるようにと発破をかけているのである。

このように、「冥加にかなふ」とは、身分の高い人の行為によって自分の思っていた通りになることである。本人ばかりでなく、自分の息子や娘などにとつてよいことが生じた場合にも用いられる。また、親やその話を聞いた人が、息子や娘など、本人の気持ちとは関係なく、悦んだり、感謝を述べている場合もある。この表現の場合、「仕合」や「忝けない」、「有り難い」などの感謝の意を表す語を伴って使用されることが多い。②④や②⑤のように「弓矢の」や「商の」と、先に扱った「冥加につく」と同様に、「冥加」を限定するような語が置かれることもある。

二一五 「冥加にあまる」

②⑥ 比類なき働と数々御褒美あそぼし、主膳手疵随分養生仕れと、有りがたくも御手医者まで付けられ、冥加にあまる仕合。引こもりて保養いたしぬ（『楠三代壮士』二一 一七二〇）

②⑦ 兼て隠居の願ひを相立候所に、今日我君冥加にあまる御上意にて、来年富士の夏狩の、惣警固の司を申付けるの間、首尾よく相勤、直に隠居仕候へとの仰付られ（『記録曾我女黒船後本朝会稽山』五・十一 一七二八）

②⑧ 是はく御心ニかけれられ御見舞として、貴殿を下さる、段冥加にあまる仕合。一兩日は心よきかたにて、満足いたし候（『風流大全後奥州軍記』二・七 一七三二）

②⑨ 一太刀成共打て父が孝養にせよ。重盛が孝心を感じて、ほうびに刀をくれるぞと、近習の若侍をめして、しかく仰付られ、一腰を取よせられて、伊豆次郎に下さるれば、近比冥加にあまる有がたき仕合と、三度でうだいしければ（『略平家都遷』六 一七三五）

③⑩ 在京の武士に仰付られ、大江左衛門并二佞臣流左衛門を打て獄門の木にさらすべしとの勅定。冥加にあまより有りがたき仕合と、対王はじめ要人主税植竹おみき悦びいさむぞことほり也（『咲分五人娘』五 一七三五）

「冥加にあまる」も14例あり、「冥加にかなふ」と同様に、当時よく使用された表現であろう。「あまる」とは十分すぎることであり、プラス表現である。先の「冥加にかなふ」もプラス表現であったが、「冥加にかなふ」の場合には後に悦びや感謝を表す様々な表現が続いていた。それに対して、この「冥加にあまる」の場合は主に「仕合」である。

⑳は、御家老兵庫殿から、十五ヶ条の罪科を犯した車坂悪右衛門を討つようと、和木主膳と高浜民四郎に仰せが下だった。そこで、悪右衛門を討ちに行き、主膳は肩先を切りつけられたが、兩人で首尾よく討ち果たした。そして、多くの褒美をいただき、主膳に対してありがたいことに医者まで付けられたので「冥加にあまる仕合」と感謝の意を述べている。㉑は、祐経が曾我兄弟との勝負のために、ご奉公を引いて隠居したいと願いを出していた。今日、頼朝から来年の富士の夏狩の警固の棟梁を首尾よく勤めたらすぐに隠居するようにとの上意があつたので、それは「冥加にあまる」上意だと述べているのである。㉒は、家衡いへひらが鳥海とりのみ弥三郎の娘しのぶが病気だと聞き、家臣である藤原千任ちをを見舞いに行かせたところ、弥三郎が「冥加にあまる仕合」と感謝の意を表しているのである。㉓は、伊豆次郎が敵である国春禅門を打つて親の勤気を許されたいと述べた。重盛公がその孝心に感じて次郎に刀を与えたことに対して、次郎は「近比冥加にあまる有りがたき仕合」と感謝の意を述べて、その刀を三度頭の上まで押し頂いたのである。「近比」という強調表現の副詞、さらに「仕合」だけでなく「有りがたき仕合」とあり、悦びの度合いが大きいものである。㉔は、天皇が謀計を図っている大江左衛門を打つようと勅定を出した。そのことよって、国の敵、身の怨と思っていた、対王や要人、主税、植竹、おみきは大江左衛門を打つ大義名分ができたので「冥加にあまり有りがたき仕合」と述べているのである。

用例からわかるように、「冥加にあまる」の場合、勅定や御意、上意に対しての感謝である。それらは主君から出

されたものであるから、主君への感謝といえよう。この「冥加にあまる仕合」というのが、主君からの命令に対する典型的な挨拶表現であつたのであろう。ただし、その程度によって「近比」とか「有りがたき」という修飾語を伴つて用いられる。また、主君に対する感謝表現であるから、「冥加にかなふ」に見られたような自己に関わるような「冥加」に対しての限定の表現は用いることはできないのであろう。この「冥加にあまる」の「冥加」は、神仏の加護以上、すなわち予想以上というような意味合いとならう。

二一六 「冥加しらず」

③① つきぐくの女房達、お姫さまの盃を土の上へなげ捨し、みやうがしらずの太鼓持。おわびを申上ずば、たゞ置事にあらずと、口々にのしりければ〔桜曾我女時宗〕一 一七二二)

③② 大名多い中に、今火の出の工藤左衛門様の、御挑灯の火でたばこくらふとは、冥加しらずめ。今一言いふて見よ。ほうげたを切さげてくれんとねめつくるを〔記録曾我女黒船〕二 一七二八)

③③ 貞房が首筋もとを引つかんで引よせ、をのれは入道が身にかへぬほどのひさうの仏御前を、ゐころさんとはいたせしぞ。冥加しらずの老ぼれめ〔御伽平家後風流扇子軍〕三・八 一七二九)

③④ 師を執する事七尺去て影を踏すとさへいふに、蔭にゐて枝を折。天に向つて血をふくむ。逆悪をしらざるゑのころにおとりし冥加しらずの人非人〔鬼一法眼虎の巻〕三 一七三三)

③⑤ 此節喜世七世上の取沙汰あしければ、先拾五貫目御返済なざるべしと、証文をさし出せば、おやち喜三郎は明た口をふさぎもせず、奥にかけゆきめうしらすのばちあたりめ。七生迄の勘当じやと〔哥行脚懷硯〕四

「冥加しらず」は7例ある。この表現は自分の行為に対して使用するのではなく、身分の高い人や話者本人に対して失礼なことを行った人に向かって、投げかける表現である。例として挙げている5例を見ても、「冥加しらずめ」「老いばれめ」「人非人」「ばちあたりめ」といった表現がその後が続いている。「め」はののしる意の接尾語であり、相手を非難しているのである。これらからもわかるように「冥加しらず」はマイナス表現である。

⑳ は、蛙が蛇に襲われそうになっていたのでそれを助けるために、時介が姫君から頂いた盃を投げ捨てたことに對して、お付きの女房達が非難しているのである。㉑ は、五郎が工藤左衛門の家の桃燈の火でたばこの火をつけたことに對する非難のことばである。㉒ は、私（清盛）の秘藏の仏御前をお前（貞房）が射殺そうとしたことに對する清盛の怒りの表現である。㉓ は、鬼若が、御恩のある師匠であるあじやりにこちらから勘当だと言ったことに對する非難である。㉔ は、息子の喜世七が遊女と欠け落ちしたばかりではなく借金もあることによつて勘当だという場面である。以上の例からわかるように、身分の高い人や自分に迷惑をかけた時に、失礼な行為をした人に向かつて、本人あるいは身分の高い人の周辺の人々が非難するのに用いる表現といえよう。この場合には「冥加」は直接神仏と関わりがないように感じられる。しかし、このような行為の場合にも現代でも罰あたりというように、神仏と結び付けるような表現が好まれたのであろう。

二一七 「冥利・冥理」

- ㉕ 誠まことに存生ぞんじやうにては本懐ぐわいをとげ、死しては神かみにいはるゝ事こと、是こゝひとへに武勇ぶゆうの徳とくとはいひながら孝行かうかうりの冥利みやうりなり。千
秋万歳目出たかりける神靈しんれいなり〔当世御伽曾我後風流東鑑〕十 一七二三

③⑦ 親殿御腹立（やくりゅう）によつて、御勘当（かんとウ）の旨（むね）个条書（こじょうが）を読（よ）みて、是非（ぜいひ）もなき御使者（ししや）を蒙（かう）り候段、武士（ぶし）の冥理（めうり）にもつきしやうに存ると、両使淚（りやうしなみ）をうかめ申上れば（『高砂大嶋台』一 一七三三）

③⑧ あちらの間へきこへる。大きな声をしてくれるなど手をあはさる、比丘（びく）をうごかさず、コレこの起請（きじゆ）は何ンのためにか、んした、仏祖冥理（ぶつそめうり）にかけてとは、うそでござんすか（『鎌倉諸芸袖日記』巻三 一七四三）

③⑨ 此義は貴公の御心ニ計御持（ごみぢ）なされて、口外（くぐわい）なされ下さるゝな。御心得（ごこころ）の為にお咄申（はなし）と、心底（しんてい）を明し申せし時、尤々成程（なりほど）こなたの内証咄（ないしやう）、武士の冥理（めうり）をかけて他言（たごん）せぬと仰せられて（『其磧諸国物語』四 一七四四）

④⑩ 忠見（ただみ）はたゞ和哥（わか）の冥理（めうり）にかけて立あふすまふなれば、男（おとこ）の大小（だいせう）ちからの多少（たせう）にはよるべからずと（『忠見兼盛彩色哥相撲』一 一七四七）

④⑪ もし此哥合（うたあはせ）にまけ申さば哥道（かだう）の冥理（めうり）につきたりと生（いき）ては居ぬ忠見（ただみ）が覚悟（かくご）（同前 一一）

八文字屋本では「冥利」1例、「冥理」5例であり、「冥理」が多い。先に「冥利（冥理）」を「冥加」の後継と述べた。それは、「冥加」が現代では使用されていないこと、また「冥加につく（つきる）」が現代では「冥利につきる」となっていることからである。確かに「冥理につく」は「冥加につく」よりもその使用は遅れる。しかし、「冥加につく」にも一七三〇年代や五〇年代の用例もあり、併用期間が長い。また、八文字屋本の「冥利（冥理）」の用例を見ていくと、「冥加」と重なるのは「冥理につく」だけである。「冥利おそろし」や「冥利にかなふ」「冥利にあまる」「冥利しらず」という表現は認められない。ただし、辞書類によれば「冥利（冥理）」に「かなふ」の例を見ることができると。

常の人のいはぬこと、かごかきみやうりにかなふた（『百合若大臣野守鏡』二 一七一一頃）

「冥利（冥理）」において、「冥加」に見られない表現として「〜（の）冥理にかけて」と「〜の冥理をかけて」とがある。西鶴の『好色二代男（諸艶大鑑）』にあった金田屋の「名利」は自誓のことばであった。先に『日本国語大辞典』の説明を示したように、「身分、職業などを表わすことばの下に付けて、「自分の身分・職業にかけて」と誓いの意を示すのに用いる」表現である。

用例を見ていく。③⑥は単独の使用であり、この例だけが「冥利」となっている。ここでは曾我兄弟のことを述べている。生きている時に親の敵討ちという本懐を遂げて、死んでも神としてまつられるのは、武勇の結果とほいい、その背後に孝行をしたことによる神仏の加護によるものであるとする。「冥利」は「冥加」と同じ意味であろう。③⑦と④①は「冥理につく」の用例である。③⑦は、大殿から息子である友成公に対しての勘当の旨を知らせる使者が、友成公に対して、このような使者を受けたからには武士の神の加護も尽きたように思われますと述べているのである。④①は、この哥合わせに負けたなら歌の神の加護も尽き歌人としての自分の命運も終わったと思ひ、死ぬ覚悟であるという自誓のことばともなっている。それぞれ神に見放され、その身分や職業の命運が終わったということであり、先に扱った「冥加につく」と同じである。

③⑧は、「仏祖冥理にかけて」とは、快禅律師が白拍子に書いた起請文に記されていた文句である。③⑨は、越浦団四郎が布川織部に語ったことに対して、織部が「武士の冥理をかけて」他言しないと誓っているのである。ここでは「冥理をかけて」と格助詞が「を」になっている。④⑩は、奉納する一首を忠見にするか兼盛にするかを決定するために、

二人の相撲取りをそれぞれ忠見方、兼盛方として、勝った方の歌を奉納することになった。忠見方の相撲取りはやせ肉の中男、一方の兼盛方は中より肥え、せいは五尺九寸ある大男である。そこで、忠見は「和哥の冥理にかけて（歌人としての命運にかけて）」いるから大きさや力は関係ないとする。いずれも誓いのことばとして用いられている。

「冥利（冥理）」について、第一節において、「冥利（冥理）」は「冥加」にとつて代わって「冥加」の用法を受け継いだものではないかと推測した。しかし、「冥加」に比べて「冥利（冥理）」に関わる表現が少ないことや、「冥加」にはない自誓表現の用法があることからすると、「冥加」に代わる表現というよりも、「冥利（冥理）」が自誓表現として使用されたことにより、よく似た語形である「冥加」の一部の用法をも受け継いだものと考えた方がよさそうである。

なお、八文字屋本以降に、「冥利（冥理）」に関わる表現として、新しく「冥利が悪い」が出現してくる。

女良のきつねだから、竹むらでもまぐそをうりそうなものなれど、それではめうりがわるひとつて（『玉磨青砥銭』一七九〇）

三 「冥加」に関わる表現のまとめ

浮世草子である、西鶴の作品や八文字屋本の作品における「冥加」に関わる表現について考察してきた。その結果、次のようなことがわかってきた。

まず、それらの表現がプラス的な表現なのかマイナス的な表現なのかについては次のようになっている。

プラス的な表現 冥加ない（上からの行為に対して） 冥加にかなふ 冥加にあまる

マイナス的な表現 冥加ない（下から上への行為に対して） 冥加おそろし 冥加につく 冥加しらず

「冥加ない」には使用される状況によってプラス的に働く場合もマイナス的に働く場合もあったように、「冥加」に関わる表現においてもプラス的なものもあれば、マイナス的なものもある。プラス的な表現の場合は、目上からの行為に対する感謝の表現である。それに対して、マイナス的な表現の場合は、主に目上に対する失礼な行為の場合に用いられる。

次に、「冥加」の前に身分や職業に関する語を伴うことがあるのかわからないのかについては次のようである。

伴うことがある……「冥加につく」「冥理につく」「冥加にかなふ」「冥理にかけて」

伴うことがない……「冥加ない」「冥加おそろし」「冥加にあまる」「冥加しらず」

限定的な語を伴うことがあるものは、その身分や職業に重点が置かれている。それがその人物にとっては重要なのである。一方伴うことがないものは、自分では限定することができない場合のものである。

これまでの拙稿で扱ってきた「冥加ない」については後に述べることにして、それ以外のものについて、それぞれの意味用法を説明する。

「冥加おそろし」は、西鶴においては、商家の女房の服装が大名の御前や高家の貴人さえ身につけない分の過ぎたものであることに對して用いられていた。八文字屋本では、身分の差がありすぎる相手にそのようなことをするの

は失礼な場合での使用であった。このような例から、「冥加おそろし」とは、分の過ぎたことをすると神仏から見放されることになり、罰がおそろしいという意であろう。

「冥加につく」の場合には身分の高い人との関係はあまりない。現在の落ちぶれてしまった状況や、どうにもならない状況になった時に使用される。そのような状況になったのは、神仏の加護が尽きてしまい、神仏から見放されてしまったことによる。「つく」とは、近世においては尽きることであり、終わってしまったという意味である。「冥加」の前に身分や職業を表す語が来る場合は、その身分や職業に関係している神による加護に見放されてしまい、その身分や職の命運が尽きてしまったというように使用される。

「冥加にかなふ」とは、身分の高い人からの行為によって、自分の思っていたことが叶った場合に使用される感謝表現であり、近世中期によく使用された表現である。単なる「有りがたい」や「かたじけない」ではなく、「冥加」という語を伴うことよって、神仏の加護がその背後にあるという、程度の大きさを表しているであろう。「冥加ない」とよって代わって使用されるようになった感謝表現であるが、その後「仕合」や「忝けない」「有り難い」などの感謝を示す表現を必要とする。

「冥加にあまる」とは、神仏の加護以上、すなわち予想以上ということとで、大きな表現ともいえよう。それは、この表現が主君からの上意や御意に対するものであるからである。主君に対する感謝を表す典型的な挨拶表現だったと思われる。この表現の場合もその後「仕合」という語を必要とする。

「冥加しらす」は、自分や身分の高い人への失礼な行為に対して、その人を非難することばとして使用される。罰当たりというような意味である。

さて「冥加ない」は、神仏の加護がなく、神仏から見放されることである。身分の高い人からの厚意に対して使

用される時は、そのようなすばらしいことをして下さいますと、(私は) 神仏から見放されてしまいます。すなわち天罰が下ってしまいそうですと表明することによって、感謝の意を述べているのである。反対に、身分の高い人に対する行為の際に使用される時は、その行為は神仏の加護がない、天罰の下るような失礼なことだとなる。マイナス的な表現である「冥加おそろし」と「冥加しらず」は、この場合と同じような表現であり、罰があたるような失礼なことである。また「冥加につく」の場合は、神仏の加護がなく、神仏から見放されて、その立場を失ったり落ちぶれてしまうのである。

「冥加ない」は状況によってプラスにもマイナスにも使用されていたが、状況による意味の違いであったために、その用法が次第に理解できなくなった。そこで「冥加ない」に代わってプラスの場合には「冥加にかなふ」「冥加にあまる」が、そしてマイナスの場合には「冥加おそろし」「冥加しらず」が使用されるようになってきたのである。

「冥理にかけて」はプラスマイナスに関係のない表現である。この表現の場合、主に身分や職業が「冥理」の上に来る。そして相手に対して、もしそれが偽りであつたら、私の身分や職業における「冥理」が尽きてもよいという誓言として使用されるものである。ただし、浄瑠璃では、「かけて」という表現を伴わないでも、そのような誓言の意味を表していたようである。

仏神三宝番屋めうり、何事も隠さず、勿論他言致すまい (『曾我扇八景』中 一七二)

男めうり商ひ冥理きよごんござらぬ (『博多小女郎波枕』長者経 一七一)

是こはる、さいぜんは侍めうり、今は粉屋の孫右衛門あきないめうり。女房限つて此ふみ見せず、我一人ひけんして、きしやう共に火に入ル、せいもんにちがひはない (『心中天の網島』上 一七二〇)

おわりに

「冥加」に関わる表現は中世においては「冥加ない」と「冥加が尽く」だけのようであったが、近世になると様々な表現が出現してくる。この「冥加」に関わる語について、辞書においては他の「冥加」の表現に同じというような形で示されていることが多い。しかし、その基になっている「冥加ない」の意味記述さえ十分にされていない現状からすれば、他の項目についても適切な記述とは言えないであろう。また、「くと同じ」とあるが、それぞれの表現が同時代に併用されているのであるから、そこには何らかの用法の違いがあるはずである。

そこで本稿では、ある程度用例を確保して分析が可能な仮名草子、特に八文字屋本の用例をもとに、近世中期から後期にかけてのそれぞれの表現の使用状況を考察した。その結果として、明らかにできた点は第三節「「冥加」に関わる表現のまとめ」に記した。

これまでにはなかった「冥加」の前に身分や職業に関する語の用例が見られるようになり、特定の神の加護に限定されるようになる。それに伴って、「冥加」に関わる表現が衰退していくようにみえる。今のところ、自誓表現の「冥利（冥理）」の使用が多くなったのが一番の原因ではないかと考えている。「冥利（冥理）」は「冥加」とよく似た語形であるために、「冥加」が淘汰されたのではないだろうか。ただし、自誓表現以外には「冥利（冥理）」につく）にしか使用されていない。その点から「冥利（冥理）」の影響だとはなかなか断定しがたい。その他に、上方と江戸との文化の違いもあるのかもしれない。上方と江戸で刊行された洒落本、また上方での談義本、江戸での人情本や滑稽本を調査する必要があるであろう。

また「冥利（冥理）」に関して言えば、近世と現代とは意味用法が異なるが、なぜ「冥利に尽く（尽きる）」だけが使用されなくなるのか疑問である。「冥利（冥理）」の場合には、この語の前に身分や職業を表す語が付くことが多かった。「冥加」の一部にはそのような用法を利用したものもあったが、そのような限定を付すことができない表現もあった。「冥利（冥理）」はそのような全体に関わるような表現ではなかったのである。そもそもこの語が、自誓表現として出現してきたことと大きく関わっていると考えられる。約束が守れなかったら、あくまでもその身分や職にかける命運が尽きるというように、あくまでも限定することに意味があったのであろう。先の点に加えてこの点についても今後の課題である。

注

一 田島優（二〇一四）感謝のあいさつ表現（『柳田方言学の現代的意義』ひつじ書房）

田島優（二〇一六）困惑（自己）から同情・配慮（他者）へ―感謝表現の発想法の変化―（『近代語研究』19集 武蔵野書院）

参考文献

田島優（二〇〇四）「冥利（冥加）に尽きる」考（『日本文学ノート』39号 宮城学院女子大学日本文学会）

田島優（二〇一三）「冥加ない」再考（『人文学会誌』14号 宮城学院女子大学大学院）

付記 本研究は、JSPS科研費、基礎研究（C）「発想法による挨拶表現の歴史の変遷と地理的分布の総合的研究」（P16 K02740）の助成を受けたものである。

（たじま・まさる 法学部専任教授）